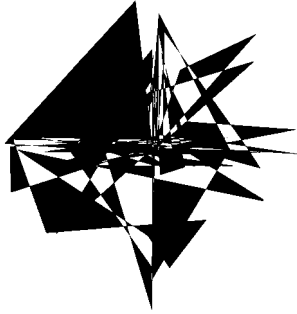


中東情勢分析 文化紹介



アラビアの日本人 - 日本のムジャーヒディーン -

近畿大学 国際人文科学研究所 教授

(助)日本エネルギー経済研究所 研究理事

保坂修司

軍艦比叡のオマーン訪問

前回オマーンと日本の関係について書いた
ので、今回もそのオマーンつながりからはじ
めよう(保坂 2007参照)。オマーンを訪問し
た最初の日本人は有名な地理学者の志賀重昂
だというのが定説らしい。在オマーン日本大
使館のウェブページにもそう書いてある。志
賀は1924年、マスカットを訪問し、当時のス
ルターン・タイムールと会見している(志賀
1943, 144-154)。タイムールがその後、退位し
て訪日したことは前回書いたとおりだ。

しかし、実際には1880年7月に日本海軍の
軍艦比叡がマスカットに入港し、伊東祐亨⁽¹⁾艦
長らが当時のスルターンに謁見したことが記
録に残っている(「比叡艦新嘉坡へ航海中ノ
景況ノ件」海軍省外出第419号)。このときの
模様を伊東艦長の部下だった本宿大尉が書き

しるしており、それが最近「英訳」で紹介されたので、定説を軌道修正する必要が出てきた(Honjuku 2007, 42)⁽²⁾。なお、比叡には、外務省御用掛の吉田正春、陸軍工兵大尉の古川宜誉らイラン・トルコへの使節が同乗していたが、この2人はどうやらオマーンで下船しなかったようだ⁽³⁾。



ペトロ岐部

では、これが新たな定説になるかということ、そう簡単ではない。その300年もまえにオマーンを訪問した日本人がいるという説があるのである。作家の遠藤周作が『銃と十字架』や『王国への道』といった作品でこの人物について描いているので、ご存知のかたも多いのではないかと。16世紀から17世紀にかけて生きたペトロ岐部(あるいは

ペドロ岐部)というキリシタンがその人である。1614年、彼はキリシタン迫害の日本を逃れ、マカオ、そしてインドのゴアにいったとされる。残念ながらその先の行程はまったくの推測でしかない。遠藤は、キリシタン研究で有名なフーベルト・チースリクが「おそらくペドロ岐部は船でオマーン湾に入り、当時ポルトガル領だったホルムズ(現マスカット)からペルシャを経てパレスチナに向かう隊商の群に加わったと想像されている」と述べたと引用しているが(遠藤 1979, 129), 筆者が入手しえた資料でチースリクがそのようにいっている箇所は発見できなかった。たとえば、チースリクは、岐部がインドからペルシアの古代隊商路を通して、エルサレムに巡礼を行ったと述べている(Cieslik 1959, 44)。また「ペルシャから砂漠を横切って聖地パレスティナへ」という表現もみられる(チースリク 1971, 215)。

一方、松永伍一は「マスカットまではポルトガル船できて、そこから別の船でホルムズ海峡を渡り、ペルシア側のバンダルアッバスに行ったと推測する」と述べ、そこから「ブーシェヘルからバンダレシャブへ、そしてアバダンへ出れば、幹線道路を通してバグダッド」というルートの可能性を挙げている(松永 1984, 99)。

ゴアからホルムズ、マスカットという経路が出てくるのはけっして根拠がないわけではない。当時、ゴアもホルムズ、マスカットもポルトガル領であり、ポルトガルからインドへは毎年数隻から十隻程度の船が航行していた(Barendse 2002, 309)。したがって、ゴアに到着した岐部がヨーロッパに行くのに、ポルトガル船を利用するというのは当然といえる。事実、インドまで岐部といっしょだったミゲル・ミノエス、マンショ小西の同僚キリシタンは海路喜望峰を通してポルトガルへと渡っている。

当時、日本とポルトガルを結ぶ通商路が確立しており、1617年のマカオのイエズス会事務所の記録(岐部はほぼ同じころこの事務所を訪れているはず)には、石見銀山や佐渡に関する記述が散見される(島根県の公式ウェブページ)。またそれから少しまえ16世紀なかばのことがだが、ポルトガル商人メンデス・ピントの『東洋遍歴記』にも日本の銀をめぐる争奪戦が南シナ海で行われていたことが記されている(ピント 1979 1980, 3: 239, 278等)。この状況を考えれば、マカオ・ゴアというアジアにおけるポルトガルの拠点を移動した岐部が、エルサレム行き行程として、ポルトガルの通商ルートを利用した可能性は高いといえよう。

ゴアとマスカット、さらにはシャットルアラブのあいだの航行には、ポルトガルから派遣された護衛船がつくことが多かったが、これは逆にこの地域の海路がかならずしも安全ではなかったことを意味する(Barendse 2002, 342)。海賊(この地域がのちにイギリスにより海賊海岸と呼ばれたことが想起されるであろう)に襲撃されたり、アラブ諸部族の戦いに巻き込まれたり、さらにはサファヴィー朝イランの進出も重要である。ポルトガルの最重要拠点だったホルムズがサファヴィー朝によって陥落したのはペドロ岐部がローマに到着したすぐあとであった。

マスカットからホルムズ海峡を抜け、ペルシア湾に入れば、そのなかでは小さな船舶を利用した交易がさかに行われており、さまざまな危険はあるにしても、イラクのバスラまでは比較的簡単に到達できる。そこからは陸路バグダード、さらにシリア

あるいは現在のヨルダンをとおり、パレスチナに至る。岐部のエルサレム巡礼が史実であるとするならば、このあたりが一番常識的なルートではなからうか⁽⁴⁾。

では、なぜ、岐部だけが陸路、エルサレムを目指したのか。チースリクは17世紀のイエズス会士バルトリを引用、岐部が「一部には信仰心から、また一部には世界を見たいという好奇心から」パレスチナ巡礼を行ったと述べている（Cieslik 1959, 44）。それに対して、松永は、エルサレム巡礼だけでなく、岐部のローマ行き、日本への帰国、そして殉教までも含め九州人としての気質の影響を挙げている（岐部は現在の大分県、松永は福岡出身）。正直いって松永説は、同郷ゆえの感情論がさきばしっており、科学的とはいいがたい。

とはいえ、中東との関係でいえば、筆者の周りにも多くの九州出身の中東研究者がおり、何か因縁めいたものを感じないわけではない（筆者自身は九州とは無関係）。そういえば、前回「もっとも初期の日本人「ムジャーヒディーン」」（保坂 2007, 94）として言及した川村狂堂もどうやら九州人らしいのだ。

川村狂堂のこと

この川村狂堂についてもよくわかっていない。ためしに Google で検索してみると、70件ほどヒットするのだが、日本語での言及はわずか3件（うち1件は筆者による前回の文章）。残りは全部中国語である。彼は日本よりも中国で有名なようだ。

筆者が知るかぎり、彼についてもっともくわしく書かれた日本語資料は日本人ムスリムの先駆者、小村不仁男の『日本イスラーム史』である（Google の3件のうち1つはこの本の一部をデジタル化したもの）。ただ、同書でも、川村狂堂に関する記述は断片的で、彼が具体的に何をしていたかは明確にはわからない。

同書によると、彼は戦前、中国・満州・日本を往来、中国および満州で対ムスリム工作を行っていたらしい。小村と川村のあいだに直接接触があったかどうか不明だが、同書には「川村狂堂について」という日本ムスリム青年同盟代表の丹波茂による小村宛書簡が転載されていて、そのなかで丹波は小村からの質問に答えるかたちで、川村の背景について彼自身が調べたことを紹介、旧制第四高等学校（現金沢大学）中退ということを手掛かりに同窓会名簿に記載された川村乙磨という人物が川村狂堂ではないかと推測している。だが、確信はもてなかったらしい。また同窓会名簿では川村の出身地は福岡となっている由（小村 1988, 496-498）。

実はこの推測は正しい。前回引用したイギリスのインド政府の公文書では、川村が中国人から Chuan Chung Yima と呼ばれていたと書かれている（R/15/2/539）。Chuan Chung は「川村」、Yima は「乙磨」の中国語読みであるから、川村狂堂が川村乙磨であることは間違いない。

なぜ1939年のインド政府の公文書のなかに、もっぱら中国で活動していた川村狂堂に関する記述があるかという点、川村が中国人に偽装して、サウジアラビア入国許可を得ようとしていたためである。マッカ（メッカ）、マディーナ訪問と書かれているので、巡礼を行おうとしていたのかもしれない。

甘肅におけるムスリム反乱

この英政府文書によると、川村は「約20年前に新疆でムスリムになった」という。1939年の20年前だから、1919年ごろということになるだろうか。ただし同じ資料には1917年に“Pan Yellowism and Mohamedanism”という記事を書いたとある⁽⁵⁾。であるならば、改宗を1919年よりも早い時期にもってくることもできよう。さらに1912年に四川省成都で「was admitted into the Mohamedan fold」とあり、改宗をこのあたりまで遡ってもいいかもしれない。最近の研究によると、日本人最初のムスリムは1891年にイスタンブールで改宗した野田正太郎だそうだが(Misawa and Akçadag 2007: 85)、それで見れば1910年代というのは日本人改宗者としてはかなり早い部類に属す。

また、同文書には、川村が1919年に甘肅省でムスリムの反乱を煽動したとして逮捕されたとも記されている。筆者未見の別の英公文書では、同年、甘肅で発生した狼頭会に関連する事件に川村が関与していたことが記されているようだが、甘肅でのムスリムの反乱とはこれを指すのかもしれない。狼頭会とは日本軍が中国西北地域のムスリム煽動用につくった秘密結社だそうだ⁽⁶⁾。

そのまま素直にみれば、川村は日本軍と何らかの関係をもち、中国のムスリムに対し何らかの工作を行っていたと考えられる。その後入手した1919年の日本の秘密文書(密受第492号、大正8年)にはこのあたりの事情がうかがえる。なお、この文書では川村狂堂は、福岡県の久留米出身「北京在留回々教信者川村乙磨」として登場する。それによれば、川村と他1名は、「甘肅ニ於テ支那回民ヲ煽動シタル行動アリ」として中国当局に逮捕されたというのだ。川村自身の陳述によると、彼は1918年から甘肅地方のモスクを視察するため雲南を出発、甘肅に向かう途中、蘭州で不審な行動があるとして中国官憲から目をつけられたことになる。中国側は川村が「同地回々教ニ対シ何年カ煽動行為アルモノ」と考えており、それ以前から川村が中国政府にとって危険人物であったことがうかがえる。川村は隻腕として知られているが、こうした活動のなかで片腕を失ったのかもしれない。

実はこのとき川村は中国側から「軍事探偵」、つまり軍事スパイとの疑いをかけられていた。川村は中国当局から日本の天津総領事館に身柄を移送されていたのだが、そこで今度は日本側の取り調べをうけ、「(日本の)参謀本部某要路者ノ紹介状ヲ携ヘ金谷天津駐屯軍司令官ヲ往訪」、支援を要請したことがあると供述したのである。当時の司令官川岸参謀が50ドル渡そうとしたが、少なすぎるとして突っ返した、といった生々しい記述まで残っている。日本の外務省は川村の行動や背景について知らなかったようで、軍に対し川村に何か囑託したことがあるか事実関係を照会している。これに対し軍は「事実無根」と回答した。当時の軍のことであるから、もちろん、はいそうですか、と信じるわけにはいかない。第2次世界大戦以前の日本とイスラーム世界との関係、そしてそのなかで当時の軍部や日本人ムスリムたちが果たした役割をみれば、きな臭さプンプンなのである。

黒龍会と川村狂堂

では川村はどのようにしてイスラームに改宗し、中国まではるばる旅していったのであろう。それを知るためにはもう少し時間をさかのぼる必要がある。

1909年、戦前の右翼の大立者、玄洋社の頭山満、玄洋社の海外部門ともいべき黒龍会の内田洋平、のちに首相となる犬養毅、そしてロシアから日本にきていた、タートル・イスラームの指導者、アブデュルレシト・イブラヒムらによって亜細亜義会なる組織が結成された。これは、日本以外の国にとっては、「日本・イスラーム協定」と映ったようだ（Bodde 1946, 312）。

以後、日本の右翼たちはイスラームに対する関心を急速に強めていく。とくに黒龍会はイスラームに関する調査のため、中国や他のムスリム地域に対し少なくとも5人を派遣している。川村狂堂はこの5人のうちの1人と考えられる（Bodde 1946, 312）。

ただ、不思議なことに日本語の資料では川村と黒龍会の関係を明示するものは少ない。少なくとも筆者は見つけることはできなかった。前述の小村の本でも川村に関する言及はたくさんあるが、黒龍会と関係づけた箇所はないのである。

両者の関係を示すものとして唯一、筆者が探し当てたのは、黒龍会の機関誌ともいべき『亜細亜時論』という雑誌である。このなかで、川村は「儒教は回教より出づ」という何とも不可思議な論文を書いている。川村によれば、儒書にいう人類の始祖、盤古は回経（クルアーンのことか？）の阿丹（アダム、ユダヤ・キリスト教のアダム）だそうだ。その10世後、大聖人努罕が現れ、世界がその3子、三穆、哈穆、雅伏西に分割される。「雅伏西は東土を治む。即ち今の赤泥なり」とし、赤泥とは儒書にいう赤縣、つまり中国であり、雅伏西とは「支那人類の始祖たる伏羲」だと述べる（川村 1918, 180）。努罕とはクルアーンのヌーフ、すなわち旧約聖書のノアであり、その3子とはむろんセム、ハム、ヤベテのことを指す。

要するに、儒教とイスラーム、もとは同根であったのだが、焚書坑儒で儒教が衰退、漢魏のころより邪説入り混じり、嘆かわしくも土偶・木像の類を崇拜するようになってしまった。だから、真の儒教に立ち返り、もって「回に遡るを得せしめたる」べきと、川村は説く（川村 1918, 185）。川村が活動した当時の甘粛のイスラームは「新教」と呼ばれる勢力が強く、川村も「此の派と多少の関係を有っている」と自称しているらしい（中田吉信 1971, 83）。中田によれば、新教とはスーフィズムの一派、ジャーフリーヤ教団ではないかという（中田 1971, 86）。あるいはジャーフリーヤ教団にはこうした教えがあるのであろうか⁷⁾。

閑話休題。珍説はともかく、機関誌に寄稿したからといってすなわちメンバーであると短絡はできぬ。ただ、イギリスは一様に、川村は黒龍会である、黒龍会から調査・工作のため中国に派遣されたと述べる。何か根拠があるのだろうか。

1909年に日本・イスラーム協定が署名され、インド政庁資料によれば、1912年には川村は中国のムスリムと接触している。川村が中国に派遣されたのはこのあいだということになる。しばらく後の資料なので、信憑性には疑問があるが、1941年のイギリス外務省の文書は、黒龍会の幹部が「イスラーム事情調査のため、改宗したムスリム con-

verted Mohammaden, 川村狂堂を派遣した」と書いており、これは、川村がすでに日本にいるあいだに改宗していたとも取れる (FO 371/28032)。

前述の1919年の事件ののち、川村は「軍事探偵ト認メラレ送還セラレタル」とあるので、いったん日本に帰国したのかもしれない。しかし、その後も日本と中国のあいだを往来しており、川村の行動として次に明らかになるのは1927年、このとき彼は北京で回教研究会なる組織を結成、そこから中国イスラームの専門誌『回教』を創刊している。中身の多くは日本語で川村自身が書いたとされる。この雑誌は1929年、川村が中国中南を去るまでの丸2年つづいた (魯忠慧 2007)。

満州における川村狂堂

その後の川村狂堂の動きを小村の本のなかから拾いだしてみよう。1930年には北京で日本からイスラームの調査にやってきた天理教の使節と会見している (小村 1988, 74)。そして、満州事変の起きた翌1931年には「満州回教徒統一工作のために長春方面へ出馬して、活発なる活動を開始した」(小村 1988, 76)。それは1934年、満州国建国の翌年、満州伊斯蘭協会の設立というかたちで結実する。川村はその総裁に収まり、1935年からは機関誌『伊斯蘭旬刊』を刊行している。満州伊斯蘭協会は新京を本部とし、奉天に支部を、そして満州主要都市に47の分会を置き、会員数も11,400余にのぼったという (小村 1988, 445)⁽⁸⁾。

川村は、1934年の神戸モスク起工式には中国から参加、そして1938年には満州伊斯蘭協会総裁の職を辞し、北京に復帰しているのだから、1930年代には満州を中心に中国・日本を転々としていたといえる。

話はちょっと飛ぶ。1938年5月、東京の代々木で東京モスク (東京ジャーミー) の開堂式が行われた。田澤拓也によると、このとき最初にモスクの扉を開けたのは、玄洋社の頭山満であった (右写真, Wikipedia より)。さらに、アブデュルレシト・イブラヒムの挨拶につづいて、満州国皇帝溥儀の従弟、溥侗の発声で「天皇陛下万歳」が唱えられたという (田澤 1998, 77)⁽⁹⁾。



田澤は「一イスラム寺院の落成式にイスラム教とは縁もゆかりもない軍部や右翼の大立者が顔をそろえて」と書いている (田澤 1998, 78)。むろん、頭山はムスリムではない。だが、前述のとおり、イスラームには深い関心をもっていた。問題はラスト・エンペラーの従弟なる溥侗のほうだ。実は、溥侗は、イスラームと縁もゆかりもないどころか、イスラーム教徒であるという説があるのである。

これまでたびたび引用している Derk Bodde によると、溥侗は1935年、イスラームに改宗したという。Bodde はカイロの週刊誌、*al Fath* を引用、彼のムスリム名がアリーであるとし、北京に住んでいたころから、イスラームへの関心が高かったと述べる。また、アフガニスタンの *Kābul* という雑誌を引いて、溥侗の改宗において、先に

イスラームに改宗していた、その妻の果たした役割が大きいのではないかと推測している。それによると、1925年に東京で設立された The Institute for Studies in the Sphere of Islam なる組織の1934年8月に開催された会合でクルアーンのコピーを授与されたとなっている。名前で判断するなら、この研究所は回教圏研究所のようだが、後者は1938年設立なので、それだと年代が合わない。ただ、いずれにせよ、上記 *Kābul* 誌には、クルアーンをもった溥侑夫人の写真が出ている由 (Bodde 1946, 313)⁹³。

ただ、別の見かたもできる。溥侑の妻は、雪艶琴 (本名黄泳霓) という有名な京劇の女優だそう。しかも、インターネット上の一部中国語資料によれば、回族であるという。であるとするなら、彼女はイスラームに改宗したのではなく、もともとムスリム (ムスリマ) であった可能性が高い。となると、イスラーム法上、ムスリム女性の夫はムスリムでなければならず、溥侑は雪艶琴との結婚を機にイスラームに改宗したとも考えられる。2人の結婚の経緯についてはまったくわからないが、雪艶琴が1906年生まれであることを考慮すると、1935年というのは結婚して間もないころとみていい。彼らの結婚に日本の軍部・国粋主義者やイスラーム関係者が関与していたと考えるのは穿ちすぎであろうか。そして、1935年といえば、川村狂堂が満州伊斯蘭協会総裁だったときである。彼が満州国皇帝の一族をイスラームに改宗させるのに何らかの役割を果たした可能性も否定できない。たとえ、改宗に関与していなかったとしても、東京モスクでの「天皇陛下万歳」という事実からみて、日本の軍部・国家主義者たちが溥侑の改宗を政治的に利用しようとしていたことはまず間違いないだろう。

戦前の日本人ムスリムたちが軍国主義者や右翼の大陸進出、南洋進出に利用されてしまったことに関しては、日本でもようやく本格的な研究がはじまったところである。川村狂堂は文字どおりその最前線にいたわけだ。川村たちの活動⁹⁴を掘り起こすことで、日本のイスラーム史の隠された部分が明らかになってくるかもしれない。そろそろ彼らの正確な歴史的な位置づけを行うべき時期にきているのではないだろうか。

奇しくも本稿執筆中に、大川周明の幻の原稿が『頭山満と近代日本』として出版された。大川周明が古くからイスラームに主体的な関心を有し、『回教概論』(1941年)やクルアーンの翻訳である『古蘭』(1950年)を出版していたことはあえて言及するまでもないだろう。また満鉄の東亜経済調査局などを通じて前嶋信次や井筒俊彦といった日本を代表する中東・イスラーム研究者と関係があったこともよく知られている。また井筒とアブデュルレシト・イブラヒムの関係。そして、頭山満から内田良平を経て川村狂堂に至る国家主義・民族主義の流れ。実をいえば、筆者は、前嶋や井筒からみると、不肖の孫弟子に当たる。つまり、大川周明、頭山満、アブデュルレシト・イブラヒム、井筒俊彦といった戦前からの日本のイスラーム・ネットワークを辿っていくと、筆者もまた川村狂堂へと結びつけられるのである。

追記

筆者の専門分野はペルシア湾岸地域の近現代史である。したがって、本稿は専門外、素人のやっつけ仕事にすぎない。事実関係の詳細についても詰めていないし、事実誤

認もあるだろう。川村狂堂のその後に関してもそうだ。川村がサウジアラビアに入国したかどうかもわからない。1939年8月31日付英国公文書では、川村が関わったとおぼしき反英活動で、中国人ムスリム5人が逮捕され、多額の金銭が没収されたことが記されている。同文書によれば、川村は、中国西部における彼の作戦が失敗した原因として、カイロの大学から最近戻ってきた中国人ムスリムを挙げていたという（R115/2/539）。



さらに、小村の本のなかでは、川村は熊本で死んだことになっている。ただ、それがいつなのかかわからない（小村 1988, 496）。本文で引用した公文書では川村は明治10年（1877年）生まれだという。また、昭和20年6月12日付の大日本回教協会から満州国新京国立中央図書館あての書簡というものもある（小村 1988, 435）。同協会はその書簡で中央図書館が「川村狂堂の蔵書を一手に御買収相成候由」と書いている。蔵書を売却したとなれば、この前後に死去した確率も高い。であれば、享年は70歳前後。小村の本には、画質は悪いが、禿頭の、白く長い顎鬚をたくわえた川村狂堂の写真が掲載されている（小村 1988, 496）。仮に享年が70歳ぐらいとするなら、この写真は晩年のころにみえる。それにしても、この長い顎鬚は、頭山満や内田洋平のまねびなのか、それとも預言者ムハンマドのスナナなのだろうか。

参考文献（姓のアルファベット順）

- Derk Bodde 1946 “Japan and the Muslims of China.” *Far Eastern Survey*, 15 : 20 (Oct. 9)
- Hubert Cieslik 1959. “P. Pedro Kasui (1587 1639): Der letzte japanische Jesuit der Tokugawa Zeit.” *Monumenta Nipponica*, 15 : 1/2 (Apr. Jul.)
- フーベルト・チースリク 1971 『世界を歩いた切支丹』春秋社
- 遠藤周作 1979 『銃と十字架』中央公論社
- 遠藤周作 1981 『王国への道——山田長政』新潮文庫
- Ienori Honjuku 2007. “A Sea Voyage to the Persian Gulf (1880).”
Translated from Japanese by Yukie Suehiro and Michael Penn. *Shingetsu Electronic Journal of Japanese Islamic Relations*, vol. 2 (September)
- 保坂修司 2007 「日本の亜刺比亜人——1930年代の日本とアラビア半島」
『中東協力センターニュース』32 : 3 (8/9)
- アブデュルレシト・イブラヒム 1991 『ジャボンヤ——イスラム系ロシア人の見た明治日本』小松香織・小松久男訳、第三書館
- 川村狂堂 1918 「儒教は回教より出づ」『東亜時論』2 : 2
- 小村不仁男 1988 『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟
- 魯忠慧 2007 「日本对中国伊斯兰教研究概述」『人文與社会』（9月10日）
- 前嶋信次編 1975 『メッカ』芙蓉書房
- 前嶋信次 1982 『アラビア学への途——わが人生のシルクロード』日本放送出版協会

- 松永伍一 1984 『ペドロ岐部』中公新書
- MISAWA Nobuo and Gökür Akçadağ 2007. “The First Japanese Muslim ,Shôtârô NODA (1868 1904).” 『日本中東学会年報』 No 23 1
- 中田吉信 1971 『回回民族の諸問題』アジア経済研究所
- 大川周明 2007 『頭山満と近代日本』中島岳志解説, 春風社
- メンデス・ピント 1979 1980 『東洋遍歴記』岡村多希子訳, 平凡社
- 司馬遼太郎 2004 『二十世紀の闇と光—司馬遼太郎歴史歓談 II』中公文庫
- 志賀重昂 1943 『知られざる国々』日本評論社
- 杉田英明 1995 『日本人の中東発見—逆遠近法のなかの比較文化史』東京大学出版会
- 田中逸平 2004 『イスラム巡礼—白雲遊記』論創社
- 田澤拓也 1998 『ムスリム・ニッポン』小学館
- 若林半 1938 『回教世界と日本』大日社
- 吉田正春 1894 『回疆探検波斯之旅』博文館

(注)

- (1) 比叡艦長の伊東祐亨は当時, 海軍大佐, のち海軍大将, 元帥になる。
- (2) オリジナルは日本語だが, 筆者未見。英訳者は, 本宿の文章が東京の地理雑誌に掲載されたと述べているが, それがどの雑誌かについては言及していない。本宿の名は英訳では Ienori あるいは Takumei とされているが, 漢字はわからない。上記海軍省の文書では「本宿大尉」として登場する。
- (3) 吉田の旅行記にはオマーンに関する記述はあるが, 下船したかは不明(吉田 1894, 12)。
- (4) ポルトガル時代の湾岸史にくわしい金沢大学の佐々木達夫教授によると, ペルシア湾ルートのほか, 紅海回りのルートも想定できるという。
- (5) 日本語のタイトル, 掲載誌とも不明。
- (6) http://www.nx.xinhuanet.com/special/no1/2005_07/01/content_4548746.htm
- (7) 儒教とイスラームの融合に関しては, 川村とほぼ同時代の日本人ムスリム, 田中逸平の思想にも顕著である(田中 2004, 294-295)。
- (8) 1932年創設, 満州国内に166支部という資料もある(Bodde 1946, 313)。
- (9) 小村の本には「溥侁」ではなく, 「溥洸」とあるが, 前者が正しいようだ(小村 1988, 445)。ここではとりあえず, 「溥侁」としておく。
- (10) ここで引用された2つの雑誌についてはいずれも未確認。
- (11) たとえば, 英外務省公文書には, 川村のあとに黒龍会によって中国に派遣されたという Hidari Tozan という人物について言及があるが(FO 371/28032), この人物については今のところ名前の漢字すら判明していない。